

戦争民主主義の原風景



く
協力

戦時下の隣組 それは日常の絆の延長に
あった自発性は否認されてきた

なぜこれが戦争民主主義なのか？

総力戦体制は「平等」の経験でもあった

ナチ体制下では強制的均質化(Gleichschaltung)

市川房枝「隣組と主婦」(『隣組読本』1940年)

「隣組が生活共同体だといふ事になれば、これを組織して
ゐる個々の家庭を主宰している主婦は、その柱だといふ
事になりませう。」

戦争は、(「国民」として)女性にとっても
一人の国家構成員であることの経験だった

— その両義性。絡め取られる自発性
民衆の「国民主体」への動員と責任

それは今日の災害ボランティアに通底する

――あまり認めたくない事実だけど



内向きの協力、外向きの暴力

だから、かの暴力の内側には、
平等意識や相互扶助の精神がありえたのだ

そこで市川房枝の戦後の「反省」(『自伝』1974年)
「消極的にしろこれに協力した責任を今更ながら痛感する
のである。もっとも戦争という国民全体にとっての困難
な時代に、自分だけ逃避しないで大衆とともに苦しみ歩
んできたことを、私は悔いていない。」

多くの惨禍を生んだ戦争であるのに、「大衆とともに苦
しみ歩んできたこと」に肯定的意味を認める思想態度

**遠くの被害者が視野から外される、これこそ
戦争民主主義の思想。これはなお問われていない**

戦後民主主義と

戦争責任論の陥穽

**戦争民主主義は
どうして見えなくなってきたのか？**

戦後の戦争責任論は何を見ていたのか？

敗戦直後から持続的な影響力を持ったのは二つ

丸山眞男「超国家主義」批判

極東国際軍事裁判（東京裁判）

は戦時日本の超国家主義の構造的無責任を分析

その中核に「**抑圧の移譲**」という論理

「上からの圧迫感を下への恣意の発揮によって順次に移譲して行く事によって全体のバランスが維持されている体系」

（超国家主義の論理と心理）

しかし、

この「見事」な構造分析は、皮肉なことに、責任の逆向きの移譲を可能にする。かくて民衆の責任意識は後景に

はG H Q主導の戦犯裁判で責任を問う

ここで留意したいその問題点は三つ

- A . 裁判は欧米諸国特にアメリカを中心に構成され、アジアを軽視する傾向にあったこと
アジアからの声が十分に反映されなかった

- B . 「平和に対する罪（A級訴因）」の設定に1928年の不戦条約を法的根拠とし、それ以前は不問としたこと

- C . 占領の遂行や冷戦状況に配慮し、訴追対象を軍部を中心として恣意的に限定したこと
昭和天皇の不訴追問題は有名だが、問題は他にも

B . 1928年以前を問わなかったという問題点から

- 20年代以前の植民地主義の歴史を不問に

戦争史 日清戦争(1894) 日露戦争(1904) アジア太平洋戦争
併合史 琉球併合(1879) 台湾併合(1895) 韓国併合(1910)
抵抗・虐殺史 甲午農民戦争・義兵戦争 三一独立運動(1919)
関東大震災・虐殺(1923)

植民地主義のこの歴史の連続と責任が見えなくなっている

- それは、歴史観そのものの分岐

アジア太平洋戦争中心史観 ... 安倍にもSEALDsにも共通する歴史観
この歴史観は実は歴史学界が温存させた 岩波の大講座もある

- 戦争民主主義という観点の抹殺

戦争と民主主義を隔離し、民衆の「主体」を見えなくした

C . 訴追対象を限定したという問題点から

責任を問われなかった

植民地主義の実行者たち①



吉田茂

首相(1946～47年
1948～54年)

1878年生。1906年外務省入省。

07年奉天（瀋陽）。12-16年安東領事・朝鮮総督秘書兼務。18年済南領事。

22-25年天津総領事。

25-28年奉天総領事。

20年にわたる中国勤務中

一貫して

帝国主義の積極外交推進者。



孫 麻生太郎
現 副首相

責任を問われなかった

植民地主義の実行者たち②



岸信介

首相(1957～60年)

1896年生。1920年農商務省入省。
革新官僚のリーダー。満洲国国務院で総務庁次長（No2）。統制経済の専門家。
日米開戦時の東条内閣の閣僚

戦後にA級戦犯被疑者として
巣鴨プリズンに収監。冷戦激
化の様相で不起訴。CIAと関係。



孫 安倍晋三
現首相

吉田も岸も、いずれも中国侵略、満洲
支配に強硬論・統制論の立場から関与

現在の東アジアの政治指導者たちとその父祖

韓国



朴槿恵
大統領

北朝鮮



金正恩
党第一書記

中国



習近平
国家主席



父 朴正熙
満洲国軍将校
大統領



祖父 金日成
抗日パルチザン
主席



父 習仲勳
革命根拠地建設
元老

いずれも抗日戦争に関与。その実績から権力へ